

すばらしい紙芝居の世界  
——出会いの広がりと深まり——

---

中 平 順 子

始めに

私は紙芝居のすばらしさに気づき活動を始めて約30数年経ちます。紙芝居は日本で生まれた独自の文化ですが、歴史は浅く現在の形式を整えてから、約80年ほどです。

紙芝居は“何時でも何所でも誰にでも”さまざまな目的、テーマに沿って行うことができ、乳幼児、幼稚園、保育園、小中高等学校、大学、病院、老人介護、地域の催し、災害地のケアとして等生涯を通じてすべての方々に楽しんでいただくことが出来ます。

現在では、絵本と同じように日本ばかりでなく世界中に広まりつつあります。私自身アジアの5カ国の方々と交流を深めています。どの人々からも愛されるのは、紙芝居が「心を結ぶ」すばらしい力があることからです。

何時でも何所でも共通するのは、紙芝居に出会うと、子どもも大人も目の輝きが変わり、優しい気配が満ちてくることです。演じる側と観る側が生身で向き合い、作品世界を通じて共感していくのです。集中力、想像力を働かせて「人間であることの喜び」を深め合うことができるからです。

振り返れば30数年間にどれだけの公演・講演・講座・ボランティア活動をしたのでしょうか？ 一ヶ月に平均して10回として年に120回、30年で3600回、おおよそ今までに4000回くらいになると思います。(多い時は一日に3回することもありましたので) 観客の方々は一回が数人から200人を超すこともありましたので、約30万人を超す方々に出会っているように思います。

このような出会いは、すべて、紙芝居が持つ心を結ぶ力によるものです。人と人との心が結ばれ、繋がって、広がって、年月を積み重ねてきたのです。さまざまな現在に至るまでの出会いは、私自身にとって「人間であること」の証と、「生きる喜び」の深まりです。

紙芝居だからこそ生まれた印象的な出会いの数々を振り返りながら、紙芝居の魅力と共に、今、紙芝居が世界中から求められるのは、何故なのかを、一緒に考えることができれば幸いです。

### 私の記憶の紙芝居

1950年代、私が小学校のころ、街頭紙芝居のおじさんが、拍子木や太鼓を鳴らしながら、自転車ですべて来ました。友達は駆け寄って、ニッキや飴などを買い、自転車の前を陣取っていました。私はお小遣いをもらったことがなく、また、紙芝居は見てはいけないと言われていましたので、皆の後ろからそっとのぞいてみるのが常でした。

「さて、明日はどうなるでしょう！」「ガハハハ…正義の味方黄金バット参上！」私の耳に今でも残っているのは、この言葉と骸骨の顔と真っ赤なマントの色です。どんなお話かもほとんど覚えていませんが、ハラハラドキドキしたことは、よく覚えています。

不思議なことに、私がいろいろなところで、街頭紙芝居を見て育ったという年配の方々に聞くと、ほとんどの人たちが、私と同じ程度の記憶しかないのです。「水飴のついた割り箸を、真っ白になるまでこすったな」などの思い出に花が咲き、誰もが懐かしさと共に、「楽しい時間だった！」と言います。それは私も同じですが、戦後の物のない時代背景と重なり、街灯の裸電球が灯って風に揺れているような、なんだかとても楽しかったような、さびしかったような不思議な思い出なのです。

### 初めての紙芝居と公民館活動

1980年代、我が子育て中、絵本の読み語りでは対応できない人数の催し時に、初めて紙芝居を演じました。地域の公民館に集まった30人くらいの親子と、数人の祖父母も混じっていました。

私は、ドキドキ心臓が鳴り、場面を抜く手が震え、汗びっしょりとなりましたが、お話の進行につれ、なんともいえない幸せな思いにつつま

れました。なぜならそれは、子どもたちの見返す目の輝きと立ち上ってくる喜びの気配を、私が体いっぱい感じたからです。

そして不思議なことに、私と同年代の若い母親たち、祖父母たちも皆こぞって、子どもたちと同じ目の輝きになっていくことでした。

無事にすべての演目を終え、控え室に戻り、ふと顔を上げると目の前に鏡があって、その鏡に私の顔が映っているのです。びっくりして見ると、その目はなんとさっきの親たち子どもたちと同じ輝きで、きらきらとしているのです。

私はびっくりしました。子どもを喜ばせたくてしたことが、私も同じ喜びにあふれている。いったいこれは何なのだろう…。そこには我が娘二人（6歳と3歳）も入っていました。

この時、私の中に不思議な熱いものが生まれ「紙芝居っていいものだなあ。こんな出会いをつくれるとは、なんて幸せだろう」と。人に喜びを届けることで、自分に二倍の喜びがもたらされ、喜びは分かち合うことで倍になると発見しました。

### 福祉施設と複式学級（特別支援学級）へ

自分の子どもにとって良いことは、他の子供たちにも良いことと、紙芝居のすばらしさをたくさん子どもたちに手渡したくて、福祉施設や複式学級へも出かけました。この二つの施設へ出かけたことから、私の心に大きな転機が訪れました。

二年ぶりに複式学級へ出かけ、教室の戸を「おはようございます」と顔を出すと、ぱっと振り返った男の子が、急にパチパチと手をたたき、駆け足してグルグル回ったと思うと、机の上に椅子を持ち上げ、胸のところで手をたたきながら、満面の笑顔で走り回ったのです。

「あら、Tちゃん。覚えていたの。そんなにうれしいの…そうよ“おおきくなあれ”のおばちゃんよ。」担任の先生が言いました。

私は呆気にとられてきょんとしましたが、先生のその一言で、胸に熱いものがこみ上げ、Tちゃんに駆け寄り、Tちゃんも私めがけて突進してきました。「Tちゃん覚えていてくれてありがとう！」Tちゃんと私は手を取り合って、ぴよんぴよんはねながら教室中をスキップして回りました。

複式学級で紙芝居ボランティアを始め、その最初の作品が“おおきく おおきく おおきくなあれ”（まついのりこ 脚本・絵）でした。男子たち8人がいて、最後のケーキを食べる場面では、ほとんどの子が飛び出してきて、ケーキにむしゃぶりつきました。舐めるはイチゴをとろうとするは、まったく本物のケーキがそこにあると信じているようでした。その時、Tちゃんは目立たず小さな身体で、声ひとつ出さず、ちょこんと座っているだけでした。

終わってから先生に「紙芝居をかしてくださいな。」といわれました。

その後、Tちゃんはこの紙芝居を百回ちかく担任の先生に演じてもらったのです。Tちゃんは「おおきくおおきくなあれ」の呼びかけにこたえられるようになったのです。口も利かず反応もぼんやりとしかできなかったのが、「オーイオーイナアレ」と、皆と一緒に言えるように…。

良い作品は何回でも子どもは見たがり、私も新しい気持ちでかかわれます。Tちゃんに言葉を話す力を育て、あんな喜びで満たしてくれた紙芝居。私は作品を選びながら、一人ひとりの心に届き、心を開放し共感の輪の中でこそ深まる「人間の喜び」の出会いづくりをしていけるよう努力をしたいと思います。そしてこのことから、紙芝居を「一生の仕事にしよう」と決心しました。

これを機に、紙芝居をどんどん上演しようと決意し、熱意ある公民館職員にも出会い、公民館に「紙芝居」をたくさん催してくださるようになりました。

### 子ども公民館事業の中で

紙芝居と昔遊びを入れ、老人会と一緒に2ヶ月に一回、1時間半くらいを目安に遊びと世代間交流をしました。絨毯を敷き、周りにお年寄りのために椅子席をぐるりと用意した設営です。お手玉（姑作）を百個作ってもって行きました。おはじきも。

参加者の、腰も曲がり真っ白な髪のおばあさんが、絨毯にいる子供たちのところへ来て、5個ほどのお手玉をつかみ、両手を使い見事な手さばきで子どもたちに見せました。あつという間に子どもたちが群がり、「すご〜い、じょうず!」と拍手喝采になりました。

おばあさんは、顔を紅潮させにっこり笑いながら「80年ぶりがしらね

え」と言いました。びっくりしたのは腰がしゃんとして子どもたちに向かっているのです。それから、おはじき遊びもお年寄りを中心に始まり、一時間の紙芝居のあとは、皆入り混じっての楽しい遊び空間となりました。

### 夏休みの自然教室お泊り会

市営の川上村にある山荘へ行き2泊3日を過ごし、夜のお話会は紙芝居でした。毎年夏に何回も続いた講座でした。

一番印象に残っているのは8月15日に当たった夜です。林の中の縄文小屋の真っ暗な中、紙芝居舞台を設営しました。焚き火の囲炉裏のパチパチ燃える明かりと、それでは暗すぎるので、懐中電灯で職員が照らしてくださり、平和を願っての紙芝居をしました。

参加者は小学生中心の親子で、幼児も数人、兄弟姉妹で混じって、30人程いました。蚊取り線香のにおいと、焚き火の煙立ちこめ、人いきれで、狭い小屋の中はむっとして懐中電灯をともしずまでは、まるで、太古の時代へ戻ったようでした。

「平和のちかい」(脚本 稲庭佳子 絵 佐藤忠良)「白旗を返して」(渡邊享子 脚本・絵)の2本でしたが、子どもたちは、昼間と違って変わった集中度で見えていました。全部紙芝居を終えてから、私はこの日一番伝えなかったことをゆっくり話しました。

「焚き火の炎を良く見てね。人間は他の動物と違って、ここまで文化を発展させてきたのは、言葉を使い考える力と、火を使うことができたからなの。この火を使ってお料理するし、鉄も溶かすこともできて、ロケットだって火を燃やし噴射して、宇宙へ飛んでいくのよね。さっきのお話の原爆も火を使う人間の知恵が作ったものよね。火を使って料理するのは、人間が生きるために食べる。原爆は人間を殺すために作られたのよね。火は人間の使い方で、生命を育てることや、その反対の殺すことにだってできるのね。

昼間、谷川の水冷たかったわね。あの水は、どんどん流れて私たちの水道から出る水になるし、山の緑は私たちが息をしている空気の酸素を作っているし、皆が登った山は大昔からの生きてきた動物や植物たちの死骸が土になって積み重なったものなの。それには長いながい時間がか

かってできたのよ。この合宿に来たのも、皆が生まれてきたことや、生きていくのに大切なことを不思議に思ったり、見つけたり、遊びながら学ぶための。

今日は8月15日、みんなのお父さんお母さんが生まれるちょっと前ころ、日本は戦争をしていて、その戦争が終わった日なの。その戦争では、たくさんの方が死んだのよ。皆がいることは、みんなのおじいさんやおばあさんさんは無事で、みんなのお父さんお母さんたちが生まれたからなのよね。それから、皆が生まれて…こうして遊ぶことができて本当にうれしいわ。

どうぞ、たくさんお勉強をして、あなたたちの生命が無事に幸せに暮らせるような楽しい世の中になるようにしましょうね。」

子どもたちは、パチパチはぜる囲炉裏を囲み、じっと瞳を凝らして聞いていました。いつか子どもたちが大きくなって、私が何故この話をしたかを思い出してもらえたらそれだけでうれしいなあと思いました。

風に煙が揺れ、私は煙に折々咳き込みましたが、上記の内容を静かに語りかけました。まるで瞳が星のように輝いていた子どもたちや母親たちを忘れることができません。

### 紙芝居グループ「紙ふうせん」の発足

1988年に、私は紙芝居を続けていくなかで、当時、紙芝居のすばらしさを確認しあい、演じてくれる二人の仲間と公民館活動を通じて出会いました。田中和子は若いころ人形劇の経験があり、ヨーガと茶道の先生です。森田明子は結婚前まで幼稚園の教師をしていて、ピアノ教師の他、童謡唱歌を広めることをしています。私は「手作り絵本」「草花遊び」「紙芝居」と子ども文化活動で、子どもや母親たちとかかわっています。

三人三様の世界を紙芝居という表現に結び、自分たちの子育ても重ねながらのグループ活動になり、夫たちも巻き込んだ家族ぐるみの出発もありました。

### 街角の紙芝居

「紙ふうせん」結成直後より、蕨市中央公民館主催事業として、二ヶ月に一回の割合で、商店街、公園、公民館前などの広場で行いました。

毎回80人くらいの親子連れや、おじいさんおばあさんも集まり、大好評で、地域でささやかな子育ての時間を作れているなあと自負しました。

市の公園作りにも参加し、街角から、街づくりへと発展できるようなかわりも果たしました。

蕨市中山道祭り、三学院地藏尊祭り、川口市のグリーンセンター祭りなど、各祭り開催当初より25年近く紙芝居公演を依頼され毎年続いています。

### 浅草、山谷の年末公演

1989年12月、ある奉仕団体の依頼で、東京都台東区山谷を訪れ、キリスト教会民間福祉施設にて、「紙ふうせん劇場」として紙芝居公演をしました。寄付金や米、下着のプレゼントと一緒に、ひと時紙芝居を楽しんでもらう企画でした。路上に舞台を設営し、シスター以外は男の人たちばかりでした。

「おばちゃんたち何しに来たんだよ。」とからかわれましたが、紙芝居に先立ち、昔懐かしい水あめを一人ひとりに手渡すと、山谷の人たちも嬉しそうに目を細め「白くしたんだよ！」と割り箸を動かしていました。

「蜘蛛の糸」（芥川龍之介原作 鈴木景山構成 羽室邦彦絵）「おかあさんのはなし」（アンデルセン原作 稲庭佳子 脚本 岩崎ちひろ 絵）等、終わった時、「本当にいい話だなあ。酒ばかり飲んでると、地獄へ落ちてしまうなあ。」等、声が聞こえてきました。

そして、森田がキーボードで「ふるさと」の曲を弾くと、全員の顔が上がり、歌いだしました。

♪ うさぎおいしかのやま こぶなつりしかのかわ ♪

それは美しい男声合唱になりました。頬は高潮し涙をぼろぼろ流している人もいました

♪ いかにいますちちはは つつがなしやともがき ♪

みんなの目は遠くを見つめていました。どこからかまた、人が集まり人垣が増えていました。毛糸の帽子を目深にかぶり、油汚れの背広の人も、いぎたない言葉を浴びせた時とはうって変わっていました。とても優しいのです。

帰りは大拍手と声援があがり、「来年も来てね！」と全員皆きらきら

輝いた目の少年たちが見送ってくださっているようでした。

私は、山谷から戻り、しばらくの間、打ちのめされたように“家、家族とは何か”を考えさせられました。あの男の人たちにも母親があり、子ども時代があったはず、どんな理由が？と問うてしまいます。山谷には癒し癒される空間があるのかもしれないとも。

そして、たとえ一人でもいい故郷に戻り、心配している家族に元気な様子を見せてほしい、ひと時の紙芝居夢空間で終わらないで…と。

### 中国と紙芝居交流

1992年には、紙芝居活動では不思議なほど、人との出会いが多くなり、全然関係ないと思えた人間同士が、実は深い縁の中に結ばれていることを発見します。それが日本を越え、中国の方々々と結び合わさり「紙ふうせん」は、1992年に日中国交回復二十周年を記念し、中国遼寧省文芸作家協会の招きで瀋陽市を訪問しました。

そして研究会に出席し、中国の作家や児童文学の研究者と交流しました。また、市内の幼年宮、少年宮で紙芝居を公演しました。

中国語の訳もつき絵があるので、よく伝わりました。反応は日本の子どもたちとまったく同じで、教育関係者から、「文化として中国にも広めたい」と感激されました。

そして、同年秋には蕨市国際交流の後援を頂、中国から瀋陽市文芸作家協会副主席他二名の方を日本に招待し、「今、紙芝居を考える」をテーマに研究と交流をしました。

### 第一回紙芝居サミットから現在まで

1993年に中国との研究会の成功が基になり、「いま拡がる、素敵な空間、紙芝居の世界」をテーマに翌年に「第一回紙芝居サミット」が蕨市中央公民館で始まりました。そこで私は実行委員長とパネラーの役割をしました。

現在まで、第15回を重ね、埼玉県内で毎年一回が、初めて、昨年群馬県沼田市で開催されました。第一回以来、私は実行委員となる人たちと心を結び開催し続けてきました。何の後ろ盾もなく、紙芝居を愛する実行委員の思いと、参加者で構成している会です。



## すばらしい紙芝居の世界

沼田市とのかかわりは、私が1995年に同市図書館の紙芝居講演で招かれ、読み聞かせグループの方々と心が結ばれ、沼田市でのさまざまな講演講座に招かれながら育てあってきた方々とのつながりです。

蕨市、坂戸市、川口市、さいたま市、草加市、沼田市と開催地は名乗り出た実行委員により動いていきました。

紙芝居サミットのすばらしさは、一人ひとりの自発的な思いを大切に、紙芝居のすばらしさに気づいた人たちが、「学び、広げ、深め合おう」と積み上げているものです。開催依頼、開催市の後援をうけながら、まったくの参加費のみの時と、市の補助金も受けての運営とさまざまです。

毎回の開催を終えて感じることは、子どもたちの未来の幸せに向かって、会議を重ねながら、実行実現に向かう方々の人間としての温かさや熱意に感動することです。紙芝居を通じて地域を豊かに、住みやすい人間環境へと発展させる力をしっかり育てあうことに発展していくと思えるからです。

### 阪神淡路大震災ボランティアへ

紙芝居の活動は“心を開放”するばかりでなく“心を癒す”力があります。震災の起きた後、「紙ふうせん」も何か役に立ちたいと「神戸」へ行きました。娘の高校の先輩がいて、宿泊と車の手配を引き受け、彼がボランティアをしていた避難所に、次々連絡を取り公演場所をつなげてくれました。

震災直後の2月初め、小学校の避難所へ行ったとき、おかつば頭の三歳くらいの女の子が入りにじっと立っていました。目が合ったので、「これから紙芝居をするから一緒に来ない？」と声をかけました。手を出すと、すっと握って一緒に階段を上がり、部屋についてきました。覗き込むと、口をぐっと結び、涙で潤んだような瞳の奥に、はっとするほどの恐怖と悲しみの色が見えました。“こんな小さいのに”，私は胸が締め付けられるようでした。

部屋には幼児から中学生まで20人ほど集まっていました。明るく楽しいお話を選びましたが、進行と共に、嬉しそうな笑顔が現れてきました。

“よかったね。生きていられて”と心の中で呟きながら、演じました。終わってから「紙芝居楽しかった？」とさっきの女の子に聞いたら、コックリうなずき、あの深い目の色で見つめられました。

どの避難所へ行っても、震災のショックは子どもたちの言葉の端はしにポロリポロリと出ていました。子どもの一言ひとことを受け止めながら、「あつ、心が開放されてきているな、紙芝居をして良かった。」と紙ふうせんの仲間たちと、思いを同じくしました。

紙芝居空間は、避難所・仮設住宅のほんの片隅で、すぐに作り出すことができ、子どもからお年寄りまで、そこにいる人たちが集まってきました。その時、子どもも大人も皆、ほっとひと時の安らぎにもいた表情で楽しんでくれました。

一人のおばあさんが「いい死に土産をもろうた…。」と手をとってお礼を言うてくださったのは、本当に悲しく嬉しいことでした。

神戸ボランティアを計6回にわたりできたのは、たくさんの方々の支援のおかげで、物品、カンパなど訪問の度、届きました。

第5回目からは、蕨市青年会議所のメンバーとその子どもたちも参加して「ボランティアとは何か？」を学ぶ神戸行きでした。

バス一台に、30人ほどの参加でした。建築屋さん、花屋さんは鉢植えの木、せんべい屋さんはせんべいをお土産にし、ヨーヨーや、小物のプレゼントもいっぱい用意してくださいました。大黒舞、獅子舞のできる人、ギターを弾き、着ぐるみを着て盛り上げてくれた人もいました。皆それぞれ自分のできることを見つけて参加したのです。

帰りのバスで感想を語り合った時、「行ってよかった。喜んでもらうことが、こんなに自分にとって嬉しいことになるとは思わなかった。」とある青年が言いました。中学生の子どもたちは「最初行きたくなかったけど、行ってよかった。役に立つことって、とても楽しい。」と感想を述べてくれました。

紙芝居のすばらしさは、人と人を繋ぎ優しい気持ちを伝え合います。紙芝居の感動は「人間として生きる大切なやさしさを」を育てることができるのです。

### 保育園・幼稚園・小学校・中学校・児童館で

教育の場での紙芝居は、お楽しみ会・季節の行事・授業（生活科や社会科学、道徳、食育他）などでよく頼まれます。学年会や、全校生徒、親子参加のときもあります。

また、作品には、地域の伝説や昔話を再話し手作りで紙芝居化した作品もあります。それは、子どもたちが地域を知る手助けになるよう、古くから伝えられている話の奥底にある、土地に根ざした知恵を受け止めてもらえることを願って、私や友人が作ったものです。出版紙芝居と組み合わせ、依頼側の目的・テーマに沿うように組み立てます。

紙芝居は集団の中で、楽しく見る力、聞く力、集中力を養うすばらしい場となります。特に徘徊したり、問題児と言われている子どもたちは、驚くほど静かに夢中になって見えています。それは演目をしっかり選び、如何に向き合い、どう演じるかにかかっています。

集団生活がうまくいかない子たちが、共感の中で他者の存在を大切に嬉しく思う気持ちを育てていくのです。紙芝居の楽しさを知った子たちは「また来てほしい」と声をかけてきます。片づけを手伝い、何か自分を表現したくて近づいてくるのです。再訪を約束することが多いのは、最高の幸せです。

### 韓国ソウル近在の六大学へ

平和紙芝居の公演をパンフルートのコンサートの合間にして欲しいと依頼されて、1990年来、出会いの深まった高校の社会科の先生から、「紹介したい方がある。」と電話があり、会うことになりました。その方は小栗房子さんといい、紙芝居に心を寄せてくださり、滋賀県と秋田県、それに韓国をつなげてくださいました。

韓国からの国際交流基金で来日しておられた日本語教師の蔡京希（培花女子大学教授）さんを紹介され、我が家のリビングで紙芝居を数本、お目にかけてのが最初の出会いでした。それからしばらくして、私を国際交流基金で韓国へ招待してくださいました。紙芝居の持つ教育性に着目してのことでした。

2005年9月に韓国ソウル近在の六大学を訪問し、日本語で紙芝居講演を行い、演じることもしました。日本語科の学生が日本語で紙芝居を演

じて見せてくれました。どこの大学も心からの歓迎をしてくださり、学生たちは熱心に学ぼうとする意欲が満ち満ちていました。幼児学科では韓国語訳を蔡さんがしてくださりとても盛り上がりました。

他の大学も紙芝居公演が終わると途端に、皆そばに来てさまざまな感想と握手攻め、抱き合った学生たちもいました。一時間前は、まったく知らない者同士が、紙芝居を見て共に過ごす、初めて出会う先生も学生たちも、あっという間に心が結ばれ旧知の仲ようになるのです。

日本と韓国、過去の歴史を考えると、私をこのように抱きとめてくださる出会いに、心からの喜びと感謝でいっぱいになりました。

### 滋賀県東近江市 能登川図書館・永源寺図書館

2006年2月より、滋賀県の才津原哲弘図書館長は、何度も紙芝居公演講座でお招きくださいました。その時に、永源寺図書館長の巽照子さんをご紹介くださり、永源寺図書館では、紙芝居公演講座の他、私が代表を務める「アジアの文化を守り育てる会」主催事業の「ベトナム刺繍創作コンテスト」の作品展示を二回も企画してくださいました。

私は遠出のときは、一泊の講座の合間には、必ずボランティアでの公演をすることにしています。私の思いを受け止めて、才津原さんも巽さんも、特別養護老人ホームやデイケア施設へ案内してくださいました。健常な高齢者と認知症の方たち二部屋をそれぞれ訪問して紙芝居をしました。終わっての帰り、廊下を歩いているとカラカラカラと車椅子の音が響いて一人のおばあさんが寄ってきて、私の手をぎゅっと握りました。

「あんた、あんた、あんた一人でいいから、又来て！」としっかりとぎって離しません。私は「ええ、また来ます。待っていてくださいね。」とその手に両手を重ねて言いました。そして、その一年後、訪問しましたが、おばあさんとは残念ながら、会えませんでした。

いつもボランティア公演は、講座に参加した紙芝居を演じようとする方たちを自由参加で伴います。介護の場もあったり、小学校や、図書館だったり、親から離された子どもたちの福祉施設だったりもします。そこで作品選びや、子どもや老人と向き合う姿勢と言葉かけを見学して

いただくためです。

また、演じることのできる方には、実習として演じていただきます。この実習によって本当の演じ方の学びができるのですから。

どの場所でも、そのボランティアの後、紙芝居グループ誕生になったと聞きます。体験の共感が、感動を伴うと皆さん生き方が変わり、自分の出来ることを信じ、その喜びが行動を起こすのです。一期一会が人生を変えるほどの出会いとなることも多いのです。

### カフェギャラリー「土瑠茶」開設

2000年8月に蕨市から隣のさいたま市へ引っ越し、家族でカフェギャラリー「土瑠茶」をはじめました。設計は西嶋正樹さんで、壁画家紙芝居作家、松井エイコさんのご主人です。紙芝居の取り持つご縁で、我が家を建てていただきました。

娘が御茶やケーキを、夫が念願の陶芸作家としてギャラリー併設です。私は、乳幼児親子の集うチャイルドサロンと文化を大切にする方々を結ぶ会を企画しています。

カフェにはグランドピアノがあるので、クラシックやジャズのライブコンサート、紙芝居作品研究会も月に一回しながら、紙芝居の奥深さを学びあっています。

### 乳幼児とその母親のためのチャイルドサロン

2000年12月から、毎月一回チャイルドサロンを、13日の13時より一時間半ほど二階サロンを地域に開放し、子育て支援として参加費無料で催しています。核家族が多い今、若い母親の一助に、また、成長と発達の中で、乳幼児期が一番人間としての基本の人格が育つ時代として大切と思い、子育てのコミュニケーションづくりもかねています。

月ごとの行事や季節に合わせた草花遊び、紙芝居や絵本、エプロンシアター、手遊びもしています。10～20組の親子でいっぱいになる狭さですが、私の孫も一緒に入り、外の娘たち孫たちが増えたような雰囲気、地域のおばあちゃん役として、なんとも幸せな楽しい会になっています。

毎回、友人のボランティアの方も数人手伝ってくださっています。開

設以来一回も休まずに続き120回を越しました。さいたま市から、育児支援の場所として評価を頂、年一回の補助金は保険料になっています。

土瑠茶 チャイルドサロン100回記念の催し

「ハロー、ディアエネミー！80作品展」を終えて

(2009年4月1日～14日)

ミュンヘン国際青少年図書館の企画により選ばれた、世界の絵本と紙芝居80作品を、一同に土瑠茶2回サロンにて展示することができました。「紙芝居文化の会」運営委員の翻訳家であり、紙芝居作家の野坂悦子さんのお世話になりました。

私は、作品を手に取りゆっくり読む機会を得、素敵なお話と素敵な絵と共に「人間に生まれるとは?!」という喜びと共に、深い悲しみも感じました。光なくしては生きられない生物である人間が、光に向かえば必ず影ができる。そんな思いを起こさせるように、人類誕生以来、文化が光なら、戦争は影のように時代を創り続けて、今も世界のあちこちで「争い」が続いています。

国と国、民族、宗教、イデオロギー等、さまざまな違いが多く争いを生み続ける。戦争こそ人間の創り出す最悪のものです。個としての人間の資質と、社会を創る人間同士として「平和への共感」の質を、深め広げていくことが、これからの人間の学びと実践なのだ、改めて確信しました。

「二度と」(松井エイコ 脚本・絵)の紙芝居が「ハロー、ディアエネミー展」に選ばれたことは、紙芝居にかかわる者として、とっても嬉しく思いました。

オープニングは松井エイコさんを招き、子どもたちも交えて講演と紙芝居実演をしていただきました。広島・長崎の不幸な事実を、人類の希求する「光の源」へいざなう紙芝居作品の訴える力は見事です。

講座中に「戦争とは?」「平和とは?」を言葉で子どもたちに表現してもらうこともありました。紙芝居を見て、その投げかけに発言することも、真剣でした。私は子どもたちの背中から、「二度と」が持つ作品の本質の源を感じ、心が震えました。

私たちは、こうして人類の「影」を光に変える「文化」を創っていか

なければならない。また、希望に満ちた作品との出会いを届けなければ…。

### 私の人生を変えた紙芝居作品との出会い

わが家の二階サロンには、紙芝居が千数百冊を超えてあります。活動に必要で買い揃えてきたのと、手作り紙芝居講座作品のコピーをいただいたのと合わせると、図書館より多くあるかもしれません。

どの作品も作家世界があふれていて、公演依頼のつど作品を選ぶのに心をこめますが、なかでも以下の作品は私の紙芝居活動の中で、特筆する出会いになった作品です。

「おおきく おおきく おおきくなあれ」（まついのりこ 脚本・絵）

この作品は、複式学級での実演から、私に紙芝居人生を歩むきっかけをつくりました。作品の奥底にあるメッセージは、人間ならではの成長への願いと、その糧を心にとり入れる喜びにあります。

何時でも何所へ行っても、紙芝居の出会いの始めは、この作品を演じます。子どもも大人も、外国へ行っても。たった八場面の起承転結の中に、双方向の「大きくなりたい、大きくしたい」という人類普遍の育てあうテーマが満ち、希望と充足が紙芝居進行と共に共感し広がります。

「おおきくなあれ」と願い、私は、この作品を何千回と演じながら、現在も私自身が人間として大きく育ててもらう“心のケーキ”を食べ続けています。

紙芝居は向き合う対象を育てるだけでなく、演じ手自身も作品を演じることから、人間として育てられることを確信し、紙芝居の双方向に力を発揮する教育性に気づかされたのです。

「天人の羽衣」（堀尾青史 脚本 丸木俊 絵）

この作品は、ベトナムホーチミン近郊の貧困層の子どもたちの支援活動を始めるきっかけとなりました。

2001年5月、埼玉県東松山市にある“丸木美術館”から丸木俊さんの一周忌に合わせて、紙芝居公演の依頼がありました。そのころ丁度“日本・ベトナム交流の会”に参加し、「第二次世界大戦の時、日本の軍隊

は収穫間じかの米を、軍票にて買い上げ日本へ持ち帰り、ベトナムでは、たいへんな数の餓死者があった。」とのことを知りました。

それは日本では外米と呼ばれ、私は幼いころ配給で食べたかすかな記憶がありました。私の生命を繋いだ外米は、ベトナムの人が餓死を余儀なくされた米なのです。そのことを、心深く刻んだ時に、美術館からの依頼があったのです。

丸木美術館の外の庭にて、五月晴れの穏やかな日差しを浴びながら演じたのは「天人の羽衣」でした。この作品は原爆の図を描いた、丸木俊さんとは思えない明るい美しい表現にあふれています。あの日、私は背中に「原爆の図」黒と白の墨の世界を背負いながら演じました。

人間だからこそその“美”を表現して、自分自身の尊厳を守り、他者を許しながら、勝ち取っていくことへの作品の見事さに、観客も私も演じながら、新たな感動を受けました。

そのとき私へのカンパが1万5千円あり、受け取った時あまりの重さ(俊さんの一周忌という)に手が震えました。このお金は無駄にはいけない、大事にしよう。そう決心して、それからお金を足して三万円にしました。それはベトナムに換算すると三十万円の価値があるのです。

そのお金を基に、ベトナムの恵まれない子どもたちの自立支援“ベトナム創作刺繍コンテスト”が始まったのです。(「アジアの文化を守り育てる会」ホームページご覧ください。)

もしこの作品を演じなかったら、ベトナム支援活動は始まらなかったと思います。

### 「紙芝居文化の会」運営委員として

2001年「紙芝居文化の会」立ち上げ時に、代表のまついのりこさんより声がかかり、運営委員となりました。作家や出版社、編集者、文化人、各地の読み聞かせ運動をしている人たち等が参加し、紙芝居の理論を追及し、「紙芝居文化」の向上発展への研究を深め広める中心的な会です。国内と海外、世界へ広がる紙芝居の会となっています。

私は、そこでの深い学びとかかわりのなか、講演講座の依頼も増え、紙芝居活動が全国的な広がりになっています。



## 終わりに 「演じてこそその紙芝居」

京都の論楽社の「言葉を紡ぐ会」にて何回か紙芝居講座をさせていただき、主催者の虫賀宗弘さんが講座の後、以下の「心の戸をひき開いてごらん」という、すばらしい言葉を紡いで私に感想を下さいました。

“出会いはいつも恵である。その恵を思うと、「人生の一寸先は光」と言う造語が心の中に湧いてくる。(中略) 中平さんが演じる紙芝居は、「単純な高貴さ」に満ちており、正直言ってびっくりした。紙を一枚引くごとに、聞き手の心の戸を開いていく。まるで両戸を引き開いて、朝日のぬくもりを心の座敷にむかえいれるようであった。”

演じてこそその出会いを見事な言葉にしてくださった虫賀さんに、評価の高さに恐縮しながらも、言葉をいただく喜びでいっぱいになりました。

紙芝居は脚本と絵が添えられ、出版では一作が8枚から12枚、16枚の場面で、起承転結に構成されています。その一作ごとを舞台にいれ、場面を一枚ずつ抜き、差し込みながら進行するのです。

演じ手は話の内容をより豊かに伝えるために、ゆっくり抜いたり早く抜いたり差込にも緩急をつけます。観客にしっかり向き合い、コミュニケーションをとりながら進行するのです。

この生身のコミュニケーションが紙芝居ならではの共感の世界をつくります。観客と言葉のやり取りや動作で進行する観客参加型、作品を演じての表情や間による物語完結型と、紙芝居は二通りに分けられます。

どちらも、作品世界を深く読み取り、自分の人生を重ね、臨場感あふれた演出をすると、吐く息は思いと共に言葉となり、静止している絵は言葉の響きと抜きの間の中で、見ている人たちの心で、絵が動きます。見る人たちの人生が重なり、双方向の共感の響きあいが感動を生み出します。

演じてこそ、お話の種を蒔くことができ、その種はいつかきっと見た人の心のなかで芽を出し、大きく育ち花を咲かせるに違いありません。

人生の花を咲かせる肥やしをつくることにもなるかもしれません。

子どもたちには「生まれてよかった!」と。大人は「生きていることがすばらしい!」、お年寄りには「生きてきてよかった!」と思えるよ

想林第2号

うな出会いをつくり続けたいと思います。

そして、私はいつも紙芝居空間を創るとき、出会った人たちと心を紡ぎながら、紙芝居という風呂敷を織り、“終わり”の言葉と一緒に、そっと、その空間を、その風呂敷全体で包み込むように、心の結び目を結ぶのです。

その結び目は社会の結び目に発展して、平和で幸せな輝きを放つことを信じています。

(子ども文化研究家)